The STYLE / Favorite

はんだで繋ぐ ありのままの音

「音の色づけはしません。自然でさりげない音こそ本当の原音だからです」。迫力のある重低音や伸びのある高音域などオーディオ機器のうたい文句は数多い。だが、東京都八王子市の音響機器メーカー「オーディオテクネ インコーポレイテッド」は1978年の創業以来、その路線とは一線を画す。

自宅兼工房には国内外から客が訪れる。海外に広まったのは、94年以降イタリアの音楽雑誌で紹介されたのがきっかけだ。「音の遊びは終わった」「音の芸術」――。欧州以外にも南アフリカからはるばる客が来たケースもあるという。イタリアとポーランド、米国に構える代理店はファンが経営する企業が運営している。10月から瀬戸内海を周遊する豪華客船「ガンツウ」の最上級客室やラウンジにも採用された。

「どうぞ安心してスピーカーに近づいて聴いてみてください」。クラシックが流れる室内で、代表の今井清昭さん(75)に促されて恐る恐る耳を近づけた。不思議とうるさくない。ボリュームを上げても同じ事だった。低音や残響音などは強調されず、どこから聴いても自然な奥行きがあるハーモニーが届いた。「コンサートの生演奏は耳障りに感じないでしょう? それと同じことを再現しようとつくってきました」

客の平均滞在時間は4時間。聴いても疲れにくく、13時間聴き続けたケースがあるというのも頷(うなず)ける。今井さんは大手音響機器メーカー出身。8社を渡り歩く中で「高音や低音に強いというのは効果音にすぎない」という考えに至った。癖の無い音質が「インパクトに欠ける」との声もあるが、後日、違いに気付き再訪する購入客が多いという。

スピーカーやアンプやレコードプレーヤーのほかケーブルといったアクセサリーを取りそろえる。全てが今井さんと長男、妻の3人による手作りだ。受注生産でアンプならば完成まで1～3カ月かかる。ハンダごてを手にする今井さんは「当初から作り方は同じ。難しいことは一切していない」と話す。

再生音がアンプやケーブルを伝い、スピーカーで出力されるまでに生じる機器の微細な振動や配線内部の抵抗が、ノイズの発生や音の劣化に繋がることに着目。揺れを抑えるカーボンを素材に用いたり、プリント基板を使わず一からアンプの配線を手掛けたり。音源に忠実な造りを貫くため、音楽信号を伝える上で重要なトランスの開発にも力を注いだ。

製品の良しあしを判断する上で、頼りにするのはデータではなく、コンサートに通って本物の音に触れ続けた自身の耳。「聴くのはあくまで人間。数字には表れない本能で感じる部分がある。日進月歩で新たな技術が生み出される中にあっても、オーディオという文明が文化である音楽を踏みにじらないように」。この揺るぎない哲学は、開発当初から変わらないデザインを見れば自然と伝わってくる。

佐藤淳一郎
玉井良幸撮影

ステレオやモノラルなど17種類のアンプ(税込120万円～)を製造。真空管にこだわるのはあくまで音質を追求するためだ

イタリアの音楽雑誌で「配線の芸術」と高く評価されたアンプ内部の配線。プリント基板を使わず、全て手作業で組む